

これからの時代の土地利用について

郊外から奥山を対象として

金沢大学人間社会研究域地域創造学系准教授
博士(農学) 林 直樹



目次

第1章：基本的な考え方

第2章：低コストで可能性を維持（各論）

第3章：選び方の問題

第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持



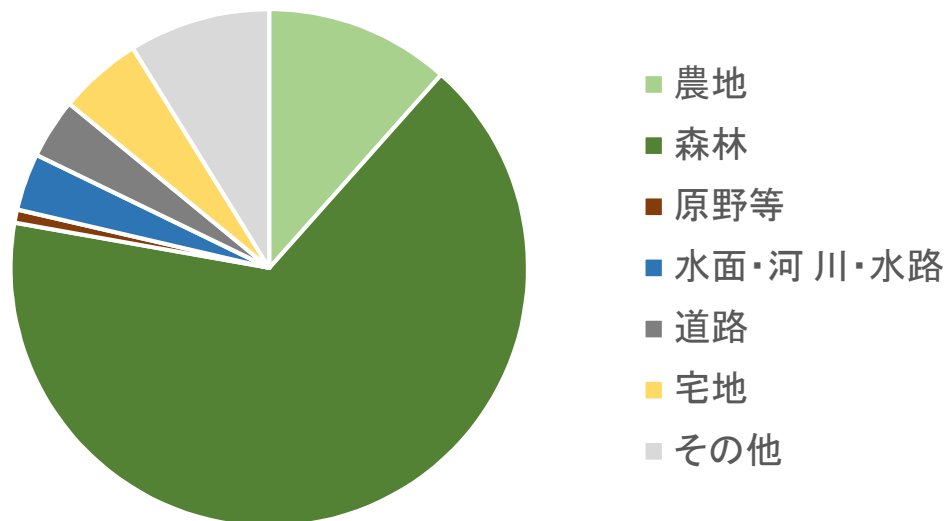
第1章: 基本的な考え方

議論の目的とスコープ

(目的) これからの時代の土地利用に関する「考え方」のたたき台を提供すること。

(議論のスコープ)

- ・ 郊外から奥山の土地利用
- ・ 時間スケールは50年程度(樹木の成長を考慮できるレベル)



国土の利用区分別面積(2022年調査)

『国土の利用区分別面積(昭和38年～令和2年)』(国土交通省)より

第1章

第2章

第3章

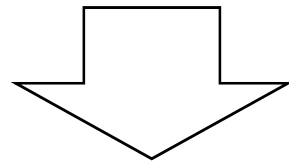
第4章



第1章: 基本的な考え方

共有すべき背景

これまでの過疎地でも地域振興の苦勞がなかったわけではないが、全国の人口は増え続けていたから、そういう全体的な増加の中の地域的、部分的な過疎にとどまっていた。国にゆとりがあった分だけ、地域のために直接・間接の手厚い支援もなされてきた。しかしこれからの人口減少社会では、全国的に人口が減ってくる。全国的に人口が減ってくると、一国の経済成長がむずかしい。国からの支援も大幅に減って、地域振興が格段にむずかしくなる。*



「恵まれた過疎」から「支援の少ない厳しい過疎」に突入。

*額賀信『「過疎列島」の孤独—人口が減っても地域は甦るか』時事通信社、2001

第1章

第2章

第3章

第4章



第1章: 基本的な考え方

これからの時代の土地利用の考え方(試論)

縮小を議論のテーブルへ(第1ステージ)

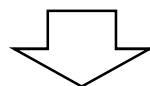
(これまで) **拡大**・現状維持(+破壊的な拡大の回避)

(これから) 現状維持・**縮小**(+拡大・破壊的な拡大の回避)

維持／**縮小**の議論では、「**わからない**」をテーブルへ(第2ステージ)

(これまで) **社会は一定**: 今いないものは将来もいない

(これから) 50年スケールの将来は「**わからない**」と考える(≠不安をあおる)



	これまで	これから
現状維持	目指す	可能なら目指す
成り行き任せの「放棄」	容認	回避
低コストで可能性を維持	(原則、議論の外)	次善の選択肢
再利用を妨げない「放棄」	(原則、議論の外)	最後の選択*

* 最低でも、所有者(意向)確認、ルールづくり(不可逆的な利用の規制)を実施

第1章

第2章

第3章

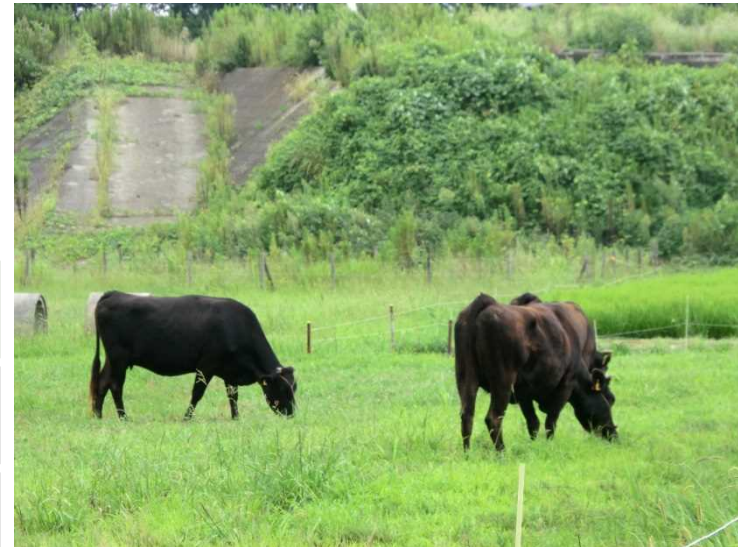
第4章



第2章：低コストで可能性を維持（各論）

田および普通畑の場合①

	これまで	これから
現状維持	目指す	可能なら目指す
成り行き任せの「放棄」	容認	回避
低コストで可能性を維持	（原則、議論の外）	次善の選択肢
再利用を妨げない「放棄」	（原則、議論の外）	最後の選択肢



低コストで可能性を維持①：草地

①水管理で雑草の発生をおさえる

②ウシの放牧

（事例）島根県大田市小山地区の農林地12haの「放牧を取り入れた保全管理」に必要な時間は1ha当たり年間19時間（放牧牛の観察や研究会などを除く）であり、農地についていえば、放牧導入前の「刈払機を使用した人力除草（1ha当たり年間177時間）」の約9分の1の作業時間で保全管理が可能になった。*

③獣害に強く手間がかからない作物の導入

* 千田雅之『里地放牧を基軸とした中山間地域の肉用牛繁殖経営の改善と農地資源管理』農林統計協会、2005

第1章

第2章

第3章

第4章



第2章：低コストで可能性を維持（各論）

田および普通畑の場合②

	これまで	これから
現状維持	目指す	可能なら目指す
成り行き任せの「放棄」	容認	回避
低コストで可能性を維持	（原則、議論の外）	次善の選択肢
再利用を妨げない「放棄」	（原則、議論の外）	最後の選択肢

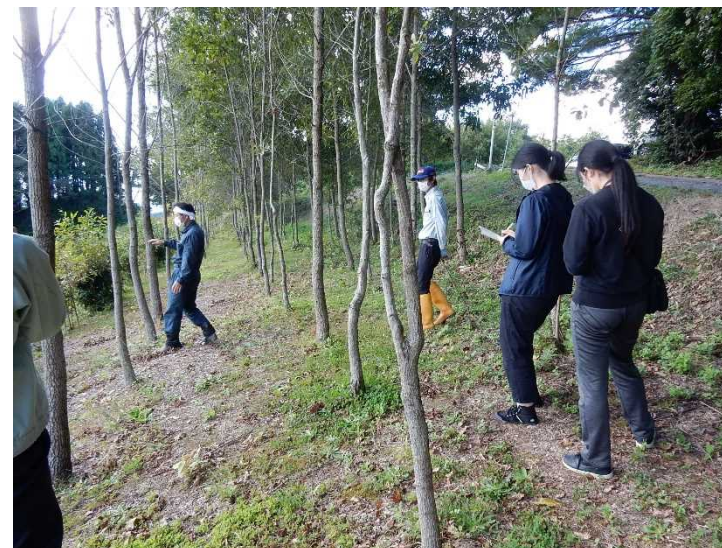
低コストで可能性を維持②：植樹

①小さく稼ぐ*1

- ・クヌギ（シイタケ原木、茶道用の炭）、ケヤキ、ウルシ
- ・サンショウ、ナツハゼ、センダン（早生樹）など

②花いっぱいのにむらに*2

- ・サクラ、シダレモモ、ハナモモなど



*1「木を植えて小さく稼ぐ」『季刊地域』41号（現代農業2020年5月増刊）36-59、農山漁村文化協会、2020

*2「木を植えて花いっぱいのにむらに」『季刊地域』41号（現代農業2020年5月増刊）26-35、農山漁村文化協会、2020



第2章：低コストで可能性を維持（各論）

人工林の場合

	これまで	これから
現状維持	目指す	可能なら目指す
成り行き任せの「放棄」	容認	回避
低コストで可能性を維持	（原則、議論の外）	次善の選択肢
再利用を妨げない「放棄」	（原則、議論の外）	最後の選択肢



低コストで可能性を維持①：低コストな合自然的林業

例：並材生産なら除間伐は省ける（ヒノキ単純林は除く）*

低コストで可能性を維持②：樹種の変更

例：単純林→**広葉樹**の導入（針広混交林化も含む）

* 赤井龍男『低コストな合自然的林業』全国林業改良普及協会（編集・発行）1998

第1章

第2章

第3章

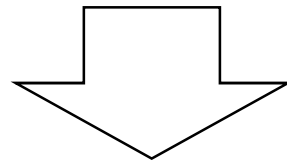
第4章



第2章：低コストで可能性を維持（各論）

人工林で議論すべき次の論点

「（前略）将来は山地・溪流から土砂を供給することが土砂管理の一部となろう」
「山地保全の新しいコンセプトは、土砂災害のないように山崩れを起こさせ、流砂系に土砂を供給することとなるのだろうか。少なくともそのような劇的な発想の転換が、新しいステージで要求されていることは間違いない」*



戦略上、表土流出や土砂崩れを容認するエリアの設定（？）

*太田猛彦『森林飽和—国土の変貌を考える』NHK出版、2012

第1章

第2章

第3章

第4章



第3章: 選び方の問題

多面的な議論が必要

	選択肢A	選択肢B
水利の都合		
獣害対策の都合		
治水の都合		
むらのシンボル		

個々の土地ごと、**多面的な視点**で、現状維持以外を選択した場合の影響を考えてみる。

第1章

第2章

第3章

第4章



第3章: 選び方の問題

複数の未来を想定した地域づくり

楽観的な未来と悲観的な未来の両方を想定し、いずれとなっても大丈夫となるように考えておく。「保険」という考え方が大切。



採用例: 長野市中条地区、飛騨市畦畑地区(写真はいずれも畦畑地区)

第1章

第2章

第3章

第4章



例:

奥山
不要な人工林
→ 広葉樹

山あいの里
不要な耕地
→ 人工林

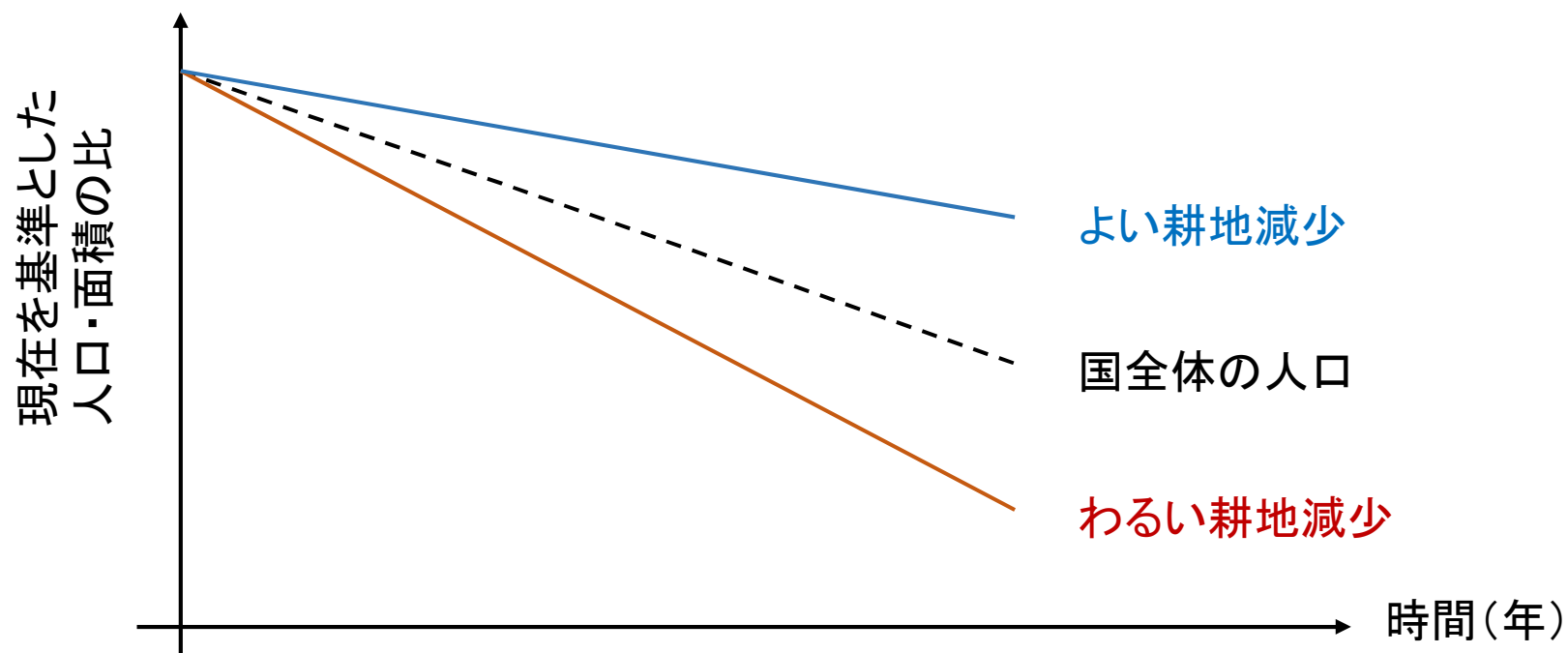
平地
不要な宅地
→ 耕地

「高利用か」「低利用か」は地形や立地条件で異なる



第3章: 選び方の問題

全体としてのコントロールも必要



2017年の人工林の面積 = 1020万ha (林野庁『森林資源の現況(平成29年3月31日現在)』)
製材・合板用材自給率の目標を100%としても、この先、必要となる面積は333万
ha~500万haといわれる。*

*岡裕泰・久保山裕史「森林資源の動向と将来予測」『改訂 森林・林業・木材産業の将来予測—データ・理論・シミュレーション—』(森林総合研究所編)pp. 41-72, 2012

第1章

第2章

第3章

第4章



第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

用語の定義

無住集落：国勢調査の人口が**ゼロ**になった集落

国勢調査の人口：常に住んでいる人の人口→常住人口

（石川県における調査の場合）

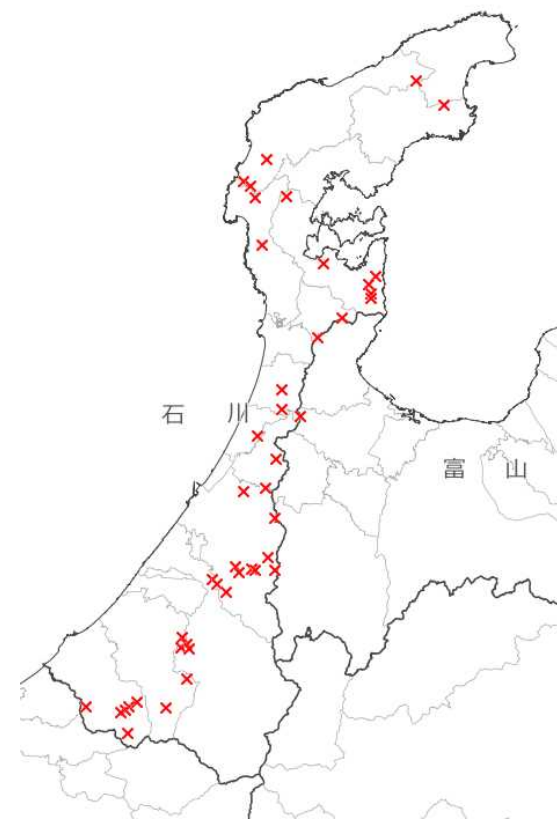
大字（おおあざ）を「**集落**」とみなす。

ダム水没などを除いた無住集落の数：石川県の場合

2015年時点：33か所

2020年時点：44か所

→**5年間で11か所も増えた**ことになる。



右の地図のベース：地理院地図の白地図

第1章

第2章

第3章

第4章

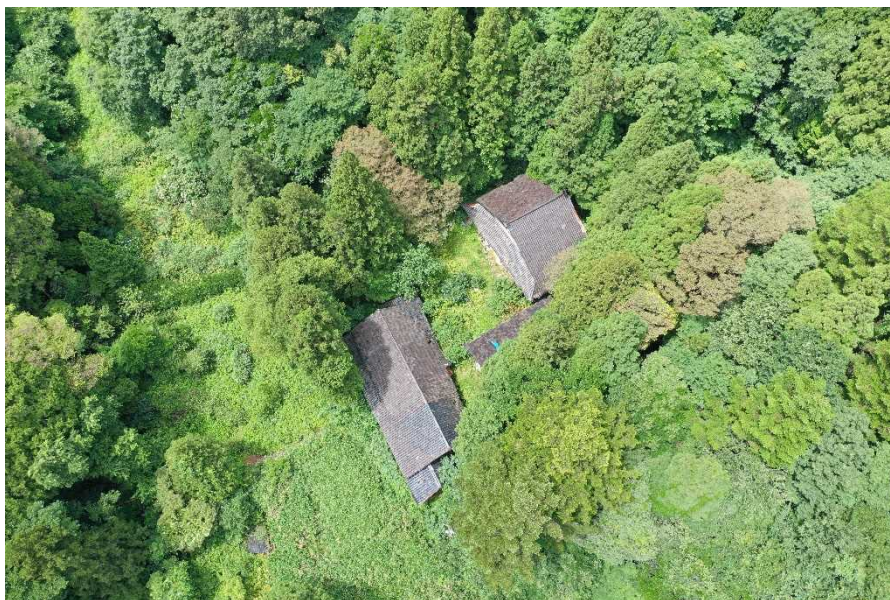


第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

無住集落の事例紹介①

七尾市外林(そとばやし)町

七尾市役所から約9km、標高約171m、年最深積雪(平年値):28cm、1995年:現住



- ・年最深積雪(平年値)の出典:メッシュ平年値2020(気象庁、令和4年公開):国土数値情報平年値メッシュデータ(以下同様)。
- ・役所からの距離:グーグルマップで測定(以下同様)。
- ・標高:地理院地図で測定(以下同様)。

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章



第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

無住集落の事例紹介②

金沢市平(たいら)町

金沢市役所から約12km、標高約229m、年最深積雪(平年値):86cm、1995年:現住



第1章

第2章

第3章

第4章



第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

無住集落の事例紹介③

金沢市国見(くにみ)町

金沢市役所から約14km、標高約384m、年最深積雪(平年値):96cm、1995年:現住



第1章

第2章

第3章

第4章



第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

無住集落の事例紹介④

金沢市畠尾（はたお）町

金沢市役所から約16km、標高約257m、年最深積雪（平年値）：99cm、1995年：無住



第1章

第2章

第3章

第4章



第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

無住集落の事例紹介⑤

小松市花立（はなたて）町

小松市役所から約30km、標高約573m、年最深積雪（平年値）：134cm、1995年：現住



第1章

第2章

第3章

第4章



第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

無住集落の事例紹介⑥

輪島市町野町舞谷(まいだに)町

輪島市役所から約28km、標高約202m、年最深積雪(平年値):38cm、1995年:現住



第1章

第2章

第3章

第4章



第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

無住集落の事例紹介⑦

白山市柳原（やなぎはら）町

白山市役所から約27km、標高約232m、年最深積雪（平年値）：81cm、1995年：現住



第1章

第2章

第3章

第4章



第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

無住集落の事例紹介⑧

白山市五十谷(ごじゅうだに)町

白山市役所から約23km、標高約263m、年最深積雪(平年値):80cm、1995年:現住



第1章

第2章

第3章

第4章



第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

無住集落の事例紹介⑨

七尾市菅沢(すがさわ)町

七尾市役所から約20km、標高約248m、年最深積雪(平年値):34cm、1995年:現住



第1章

第2章

第3章

第4章



第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

無住集落の事例紹介⑩

鳳珠郡能登町字福光（あざふくみつ）

能登町役所から約16km、標高約176m、年最深積雪（平年値）：33cm、1995年：現住



第1章

第2章

第3章

第4章



第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

無住集落の事例紹介⑪

加賀市山中温泉上新保(かみしんぼ)町

加賀市役所から約22km、標高約347m、年最深積雪(平年値):114cm、1995年:無住



第1章

第2章

第3章

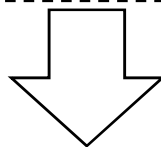
第4章



第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

無住集落の事例紹介からわかること

無住集落のイメージ：雑草雑木で覆われた薄暗い集落



- ・ 常住人口ゼロという極めて厳しい状況となっても**再興の可能性を残すことは可能**。少数でも「常住人口あり」なら、いわずもがな。
- ・ 集落の活力は、常住人口だけでは**決まらない**。



第1章

第2章

第3章

第4章

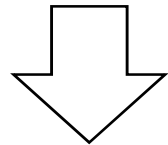


第4章：厳しい状況で集落全体の可能性を維持（希望ある無住集落の紹介）

集落振興の基盤

集落振興の基盤（集落の力）の保持

- ・関係者のまとまり
- ・土地の**土木的な可能性**
- ・土地の**権利的な可能性**
- ・集落の**歴史的連続性**（過去の歴史と現在が連続しているという感覚）
- ・自然の恵みをいかすための**古くからの生活生業技術**
（→万が一の長期的な食料不足、エネルギー不足に対する備え）
- ・常住人口だけでなく、**集落からの転出者（元住民）**も重要。



集落振興の基盤が残っていれば、**常住人口が減少しても、極端な場合、ゼロになっても再興の可能性が残る。**

- ・関係者の**帰属意識の維持**が課題。

第1章

第2章

第3章

第4章



附章

過疎地を切り捨てても財政的には「焼け石に水」

過疎地を狙い撃ちにしたような急進的な行政サービス削減の議論は建設的とはいえない。

(北陸3県を対象とした試算)

10人未満の農業集落の「属地的な行政サービス」(主にインフラ関連)をすべて停止→削減される歳出は「全体」の2%にすぎない。

- ・「全体」: 試算対象市町村の「公債費を除いた歳出決算総額」の合計
- ・属人的な行政サービス(人数に比例するような行政サービス)は一定とみなした場合。
- ・林直樹(2019): 「属地的な行政サービスに伴う北陸3県の市町村歳出の試算」『創立90周年記念2019年度(第68回)農業農村工学会大会講演会講演要旨集』264-265

財政の健全化については、もっと大きな枠組みで時間をかけて議論すべき。

